

而聞見之者多爲席上談話耳、而自省以恥焉者、則亦鮮矣、

〔一話一言二十八〕八丈島教諭

凡人と生れて我身より大切なるものはなし、わが身を養はんがために、つねの住所をもとめ、夏冬の著物をもとめ、朝夕の食をもとむるも、みな我身を大切に思ふが故なり、玄かるにそのわが身のもととは、親よりうけ得たるわが身なり、わが身を大切に思はゞ、うみつけれし親ほど、大切なものはなしと思ふべし、人々生れおちてより、いとけなきうち、親の手をはなる、事なく、親ほど大切なものはなしと思へど、やうやく年をとり、をのれが手足の自由にはたらくに、玄たがひて親をそまつにし、親のいふ事をきかず、親の心にそむくもの多し、をのれが親をそまつにするならばしにては、わが身も次第に年よりゆけば、又わが子にそまつにさる、ものなり、さればわが老人を大切にする心もちにて、人の老人をもうやまひ、わがいとけなきものをそだてあぐる心もちにて、人のいとけなきものをあはれむべし、老人の中にて耳目もうとく、手足もかなはざるものは、ことさらに大切にいたはりて、かいほうすべし、これみな人のためにする事と思ふべからず、めんく年よりて後思ひあたる事あるべき也、

中川飛驒守奥書

右之通おしゆる上は、殊さらにあつく存じ、父母老人を大切にすべし、若此後かく別に孝行のきこへあらば、御ほうびも被下品によりては、父母へも御手あて被下べし、若又かくのごとくおしへ置といへども、なを父母をそりやくに致すもの、相聞ゆるに於ては、きつと御答にも仰付らるべき間、よくこゝつへちがひ無之様相守べし、

右御勘定奉行の命によりて、予田○太草する所なり、八丈島の高札に書有之、此文を文化元年長崎にゆきし時、紅毛通詞志筑忠次郎に見せしかば、轉じて加比丹ペンデレキドウフに見せしに、